やと互に藝者家の主人の噂や白山と富士見町ではどつちが稼ぎいゝかと云ふやうな話に夢中になつてゐる。おかみは先刻銚子の代り目に下へ行つたなりまだ上つて來ない。座敷は稍しらけて鳥鍋がそろ〳〵焦げつき始めた。翰は鬼のやうな眞赤な顔をして牛飲馬食にも飽きたといふ風、箸も盃も投捨てたまゝ唯口のはたを舌なめづりしながらとろりとした眼で君勇の顔をじろ〳〵見てゐるばかりである。

「えゝお二階のお客樣毎度おやかましう……。」と裏窓の下の路次から聲色屋が何やら聲色をつかひ出した。

「誰のつもりなんだらう。拙だねえ。」

「音羽屋さんよ――ホラ――きつとさうだわよ。」

鵜崎は聲色屋の拍子木を聞くと譯もなく急に夜がふけたやうな氣がして覺えず帶の間の時計をさぐると、それを見た翰が、

「おい君、何時だ。今日はそうつと家を逃げ出して來たんで、時計も金も何にも持つて來ない。ひどい目にあつた。」

鵜崎はしめたと思つて、「もう十時です。あなた。」と可笑しいほど嚴格な調子をつくつたが、その時女中が唐紙を明けて突立つたまゝ、

「内山さん鳥渡お顔を……。」

「何だ乃公か。」

女中はにや〳〵妙な笑顔をしてゐるので翰は忽ち其の意を得た如く突と座を立つて女中と共に廊下の方へと出て行つたので、鵜崎は氣の毒な程恨めしさうな情ない顔をして其の方を見送つた。商賣に馴れた君勇もすぐにそれと察して女中が戻つて來るのを待たず、徐ろに自分の煙草入やハンケチなぞを始末して立ちぎは

にはチャブ臺の隅に載せてあつた朝日の袋までを忘れずに攫んで行つた。

「あなた、今日はちつとも上らないのね。」と二人差向ひになつた小花は冷えた盃を干して鵜崎へさしつけ、「どうなすつたのよ。今日はお泊んなさいよ。ねえあなた。久しぶりだからさア。」

鵜崎は凹んだ眼を圓くむき出して、「泊るなんて其樣事をしちや大變だ。もう歸らなくちやならんのだが、困つたな。翰君――內山君はどうしだんだ。便所か。」とどうやら立ちかけさうな樣子に、小花は叱るやうな調子で、

「あちらは彼方でいゝぢやないのよ。邪魔するもんぢやなくつてよ。」と手を握る。

「いや今日は實際早く歸らなくつちやいかんのだ、困つたなア。おかみさんは下に居るかしら。」

「ほんとにお急ぎなの。それぢや彼方へ行きませう。いつかのやうにゆつくり飲みませうよ。その方がいゝわ。ねえ、あなた。」と薄氣味わるく鵜崎の顏を見返してにつたり笑ひながら續けざまに手を鳴らして女中を呼び、「姐さんお急ぎなんですとさ。」

「もういゝのよ。突當の三疊……。」と云つて女中はどつさり茶ぶ臺の前に腰を下ろし、有合ふ箸を取つて焦げついた鍋の鳥を一口むしや〳〵「鳥鐵さんの鳥は全くいゝね。」と云ひながら皿小鉢を片付け初めた。

鵜崎はもう斯うなつたらいくら急き立てた處で仕樣があるまい。屋敷へは兎も角翰さんの居處の分つた事とぢきにお歸りなさる事だけ電話で知らして置いて十二時打たぬ中に屋敷の門を這入ればよからう。もうそれより外に仕樣はないと又もや時計を見ながら便所へ降りた時翰に氣取られないやうにそつと帳場の電話を借りて掛けた。好鹽梅に今夜はまだ御主人海石先生も御歸宅にならず蝶子さん

も別にお變りはないと小間使の返事に鵜崎は稍安心して翰の起きて來るのを待つ間、小花に引張られたまゝ見覺えのある一間へ這入つた。

いつの間にか十一時を打つ時計の音。そしてあたりが妙に寂としたやうな氣がした。鵜崎はびつくりして枕から顔を起すと窓の外に雨滴の音がしてゐる。

「これは弱つた。」

「まアびつくりしたわ。」

「雨ぢやないか弱つたな。」

「やらずの雨だわ。あなた歸れやしない事よ。車だつて芝まで大變だわ、ねえ。」と小花も今は鵜崎の口からこま〳〵事情を聞かされた後なので、さすが氣の毒さうに顔を見ながら、「あなた、二三日中にお一人でゆつくり居らつしやいよ。晝間がいゝわよ。氣がおちついて——。」





「うむ、うむ。」と鵜崎はしばらく雨の音に耳を澄ましてゐたが、久しぶりの遊びにどうやら身體も太儀さうに目までを細くして急には起直らうともしなかつた。

その時突然下の方で火事か喧嘩でも始まつたか魂切るやうな女の聲がしたかと思ふと矢庭にどや〳〵ッと梯子段を馳上る荒々しい足音。小花と鵜崎はびつくりして起上りざま唐紙を明けると、出合頭にいきなり「こらッ」と一聲鬼のやうな手に兩人ともむづと肩をつかまれた。

「何だ失敬な。」と鵜崎が叫ぶと、

「僕は刑事だ、靜かにしたまへ。」

小花は脱ぎ捨てた衣服の上にべつたり腰をぬかしてしまつた。鵜崎も事の意外に爲す處を知らず其まゝ棒立ちに突立つてしまふと、廊下のはづれの一室にも早や一人の刑事が踏込んでゐて、押入の中へ首だけ突込んだ翰と君勇の二人をば足

をつかまへて引張り出してゐる滑稽にして悲惨なる有樣が、廊下の電燈で見通しによく見えた。

「おいお前はどこの藝者だ。」と此方の刑事は手帳を取出した。年は四十前後日にやけた首の太い刺栗頭の赧顔、身丈は低いが肩のいかつた如何にも頑丈な身體つき。襟のよごれた萬筋銘仙の袷裾短く、廣げた胸からメリヤスの襯衣を見せ、鼻緒づれの處へ大きなつぎを當てた紺足袋。羽織は着ずメレンスの兵兒帶を後で結んで古ぼけた煙草入をさし、絶えず袖口がうるさいと云ふやうに袖を肩の方へたくし上げながら

「名前は何といふ。」

「小花と申します。」と云ふ聲も顫へて聞えぬほどである。刑事は笑ひながら小花の樣子を見遣つて、





「小花――どこの抱へだ。うむ其のざまは。何處から見たつて現行犯だな。」

鵜崎もわが身のさまを見廻して云ふに云はれぬ羞恥の念に忽ち耳朶まで眞赤にする。

「今度はあなたの住所御姓名だ。」

「君どうか許して下さい。僕の名譽に　　。」と皆まで云切れず鵜崎の聲もどうやら泣き出しさうな調子である。

「職務です僞名はお爲になりませんよ。二十九日間の拘留ですぜ。」

鵜崎は覺えず顫え上つた。急に咽喉がから〳〵になつて何か言はうとしても聲が出なくなつたやうな心持。頻りに唾を呑込みながら、「芝北寺町○○番地鵜崎晋。」

「年齢。」

「四十一。」
「職業。」
「繪をかきます。」
「間違ひはありませんな。」
「はア。」
「ではよろしいです。今夜はいゝです。以後おつゝしみなさい。」
刑事は云捨てゝ腰を拔かした小花を引立てやうとする。小花はわつと聲を上げて泣き出したが鵜崎はほつと一息。翰の安否いかゞと直樣突當りの座敷へ馳け寄るとこゝでも同じやうに丁度翰の尋問がすんで君勇が現行犯で引立てられやうとする處、君勇はおい〳〵泣きながら「内山さんどうかして頂戴よ。あやまつて頂戴よオ。」と喚いた聲に翰の氏名詐稱が卽座に發覺した。翰は鵜崎の名をそのまゝ





自分の名にして申立てたので、忽ち何方が眞正の鵜崎だか分らなくなつた。こゝで折角放免になつた二人は兎に角一應警察署まで引致といふ事になつた。鵜崎が半分泣聲での辯疏も最う駄目である。二人は麴町警察署の留置場に放り込まれた。

## 十四

二人は空しくその夜を留置場に明し翌日の朝もいつか十時過ぎてからやつと呼出されて係の役人の尋問を受け嚴しく譴責されて放免となつた。昨夜の時雨は不幸中の幸にも今朝はすつかり晴れて一天拭ふが如き小春日和、然しあまりいゝ天氣にあたりの明るさ二人はすご〳〵と警察署の門を出るや否や、其のまゝ足の向く方へと殆ど駈出さぬばかり息を切つて半町あまり、とある横町の曲角まで來て始めてホッとつく息と共に顏を見合した。

「君。」

「坊ちやん……。」

「實に君、人を馬鹿にしてゐやがる。失敬な奴だ。」と翰は怒に堪へぬが如く拳を握つて自分の腿を叩き「ヤケだ飲み直さう。胸糞がわるくつていかん。」

「まア坊ちやん……。」と鵜崎は呆れたとよりは寧ろ恐るゝ如く翰の顔を見たまゝ何とも云ひ得ず、昨夜一睡もしなかつた爲め眞赤にした眼を掌で摺つてゐる。

「僕ア腹がへつてたまらん。一體何時だ。」

「あゝもう直きお午です。十一時半です。」と鵜崎は帶から引出した時計を手に握つたまゝ恨めしさうにいつまでも時間を眺めてゐる。

「道理で腹のへる筈だ。君どこかで飯を食はう。愉快へ逆襲しようか。」

「何です。また愉快へ……。」と鵜崎は少し顫聲になつた。



「さうさ飯を食はせる位は無論の事だ。吾々お客にあんな迷惑をかけて其儘にして置くといふ法はない。市ヶ谷の雲林堂へ直接談判に行つてもいゝ、どうだ君、談判に行かう。」

いつまで横町の角に立つてもゐられないので鵜崎は兎も角翰の行く方へと二三歩あるき出した。その時後から「もし〳〵内山さん、鵜崎先生、いやもうどうも何とも申譯がありません。」と中折帽子を片手にひよこ〳〵お辭儀をしながら駈寄つたのは雲林堂の亭主相澤である。

二人は振返つて見るともなく雲林堂の顏を睨んだ。「私が居りやア何とかしたんですが相憎昨夜は仲間の寄合で、今朝になつてその話をきいて喫驚仰天しちやつたんです。取るものも取り敢えず駈け付けたんですが……實にどうも面目次第もありません。」

「家へは歸れんし、世間には顔出しが出來ないし、君、實に困つたことになつた……。どうしたもんだらう。」と鵜崎は雲林堂の顔をぢつと見詰めながら、何ともいへぬ程情ない恨めしさうな調子。流石の雲林堂も此の場合返事にこまつて頭をひよこ〳〵唯無暗に「すみません實に相濟みません。」

「鵜崎君煙草はないか。」と翰は言ひながら又歩き出した。

「あります。こゝに有ります。」と雲林堂は兩方の袂へ一度に左右の手を差入れ敷島の袋とマッチをつかみ出して翰の方に差出しながら、これを機會に「このまゝぢやどうも私の氣がすみません、一先手前の市ケ谷の店なり、三番町なり一寸御立寄りなすつて下さい。もうお午ですし……改めてお詫をしなくつちや、どうも氣がすみません。」

「君のところへ行つたつて營業停止だらう。」と翰は冷かに横を向いた。



雲林堂は向の四角に辻待してゐる車を手招ぎして兎に角時分どきだからと程遠からぬ貝坂上の西洋料理へ連れて行つた。翰はヤケ半分空腹に正宗のあついのをぐひ〳〵やつたので忽醉つ拂つてしまふと、もう昨夜のお灸なぞは忘れ果てたものゝ如く、雲林堂を捉へて何處かで遊び直さうといふ始末。鵜崎は家のことや屋敷の事が氣になつてたまらないので、何は兎もあれ私は一先歸つて樣子を見た上出直すからと、西洋料理屋の門口から逃ぐるが如く別れて一人電車に乘つた。

白金下で降ると初冬の晷はいつか傾き崖下の裏町はもう薄暗く、早や灯をつけてゐる家さへあるのに驚いて時計を見ると四時過ぎてゐる。鵜崎は息を切らして北寺町〇〇寺の石段を上りわが家の戸口まで來て何心なく内をのぞくと土間には一足大きな長靴がぬいであつて、上框の二疊には柿色の外套とサアベルの置いてあるのが半分明け放ちにした障子の間から見えた。

鵜崎は佐倉の聯隊にゐる弟の亥之松が間のわるい時にやつて來たものだと、昨夜の不始末に氣おくれがして其儘格子戸の外に佇立んだ。

「待つてゐたつて歸らん筈だ。こら此の夕刊を御覽なさい。」

突然亥之松の土鑼聲が聞え出した。何やらそれに答へるらしい女房お慶の聲。つづいて弟の土鑼聲が「これア確に兄貴にちがひないです。」内山翰（三十）鵜崎晋（一四十）

……。」

これを聞くと鵜崎は格子の外にも居たゝまれず、その儘足音を忍んで再び寺の門を出たが無論何處へも行くところはない。足の向くまゝに白金下の電車通りの方へ來ると四辻で新聞賣が夕刊〳〵と呼んでゐる。鵜崎は毎夕新聞を一枚買つた。懷中から錢を出して新聞を買つたのは生れてこれが始めてゞある。内山海石の玄關番をやめて富士見町へ家を借りてからも鵜崎は新聞は取らなかつた。三日目に





海石翁の屋敷へ行つた折讀めばよい。又は電車にでも乘つた時隣席のものが廣げてゐる新聞を盜み讀みすれば月に二三十錢がものは目に見えて經濟になると考へてゐた。然るに今四十一歳の冬に至つて初めて鵜崎は身錢を切つて夕刊を買ふべき必要にせまられたのである。初冬の夕日は折しも斜に低く向側の人家の軒裏までさし込んで來たが日陰になつた此方は却つて俄に薄暗くたそがれてしまふので、目がちらついて摺のわるい新聞は一層讀みにくい。鵜崎は停留場の柱の下に立つて、電車を待つふりで眼を皿のやうにしながら、わが身の恥の曝し場はどこかとさがした。容易に見當らぬのも尤、丁度紙の折目になつた欄外に出てゐる。

落花狼籍　近頃山の手諸處の待合にて内々花札を弄ぶものある由にて昨夜麹町四谷の角袖各手分をなし時間前の不意を窺ひ數ケ處の待合に踏み込み相應の得物あり津ノ守にては――富士見町にては――

鵜崎は仔細に待合の名と藝者遊客の名とを讀み下して深い〳〵溜息をついた。佐倉の聯隊から出て來た實弟陸軍大尉鵜崎亘之松が讀んでゐたのもこの夕刊にちがひはない。家には新聞はない筈なのに自分の歸宅を待つ間子供にでも買はせたのが運惡く眼についたものであらう。それは兎も角自分はこれからどうしたものであらう。亘之松のゐる間はどうも家へは歸りにくい……。

鵜崎は弟の亘之松とは先年父の死んだ折其の母の引取方について一時不和を生じた間柄であつた。もう十年程前のことである。その時兄の鵜崎はまだ岳陽畫塾の玄關にゐたが弟の亘之松は陸軍士官學校を卒業して早くも麻布一聯隊附の少尉になつてゐたので、その時の場合弟は否應なしに父の死んだ後の家事一切の始末と、老母の身を引受けなければならぬ破目となつた。無論其の時弟は兄へ對して海石谿の塾を引拂ひ家へ歸つてくれねば困るからと相談したが、鵜崎は別





に責任を逃れやうといふづるい考へからのみではない、實際その時には繪筆一本ではとても自分一人食べて行くのもどうかと思はれたので、いろ〳〵泣言を並べたり又おだてたりして弟の方へ責任をすつかり背負はしてしまつたのである。

一體總領の鵜崎は兩親はじめ弟亘之松からも妹の辰子からも馬鹿にされきつてゐた。妹は小學校からつゞいて尋常師範學校に入り父の死する前の年には亘之は早くも四谷邊の小學校の教員になつて月給を取る身分、その又前の年には亘之松が士官候補生になつて新しい枯色の軍服に提げたての洋刀をぴか〳〵輝らせてゐるのに、總領の晋は海陸の士官學校は勿論のこと商船學校も師範學校も官費の學校といふ學校は一ッ殘らず入學試驗に落第して、詮かたなしに内山先生の屋敷へ書生に仕込んで畫工になつたものゝ一向名が出ない始末。もと〳〵裁判所の書記を職めてゐた父は薄給な官吏のくせとて、次男亘之松の新しい軍服と三女お辰

が小學教員拜命の辭令を見るや、その嬉しさ賴母しさにつけて、總領の不甲斐なさ意氣地なさが俄に目につき、あんな愚圖はもうゐても居なくてもどうでもよい。亥之松と辰子さへゐれば老の身の行末はすこしも案じる事はないと思ふ心はおのづと何かにつけて鵜崎の目にも知られるのであつた。鵜崎は大に憤慨もし悲觀もしたがどうも仕樣がない。憤懣と悲觀の結果彼は兩親や弟の手前空とぼけて、美術家たる身は世の中の事は何が何やらさつぱり分らんやうな顏付をして、そのまゝ幾年たつても家へは歸らず海石翁の玄關に居られるだけ尻を落ちつけて見ようと度胸をするた。年々月給が增え、身分が上る弟や妹とは何となく一緒の家には居辛くも思はれるし、其れと共に鵜崎は又海石翁に對しては先方から出て行つてくれと云ひ出すまでは何年でも玄關にゐて家事の用をしてゐたら遂には家族の一人も同樣になり內山家ではどうにか行末この身の立つやうに心配しなけれ





ばならぬやうになるだらうと隱忍極まる考へを起したのであつた。

かくて鵜崎は愚鈍と無能を楯にして老母を弟と妹に托したなり、軈て父の三週忌がすんだ頃內山家の仲働きお慶といつて實家は碑文谷在に少しは田地もある農家の娘を貰ひ富士見町へ家を持つたが、さうなると亥之松も妹のお辰も、だまつては居ない。もと〳〵總領である以上は母を引取るか然らずば月々養育料を出すが當然だと云ふ。鵜崎は以前一家から輕蔑された怨みを晴らすは此時といよ〳〵とぼけて、口先では頻りに弟亥之松と妹お辰の才能や地位身分をほめそやし自分のやうな貧乏畫師の家へ母親を引取つてまづいものばかりを食させるよりは國家の干城たる軍人さんのお宅にお置申した方が第一母上御自身にも世間へ對して何程肩身が廣いか知れまいと云ふやうな論法で巧に逃げを打つた。亥之松は軍人だけに氣も短くブウ〳〵云つて怒りながら面倒臭いので其の翌年母が病

死の折も葬式の費用は大方苦しい中を算段して立派に執行した始末。それ以來兄弟の間は今だに甚だ氣まづくなつてゐた。

鵜崎はこの氣まづい弟に昨夜待合から警察へ拘引された不始末を知られては兄の身として何ぼ何でもづう〳〵しく白をきる氣にはなり得ない。それと共に内山家に對しても亦四十面をさげてのめ〳〵と昨夜は翰の坊ちやんと御一緒に遊びましたと詫られもせぬ　鵜崎は家へも歸れず師家へも行かれず、思へばつくづく進退こゝに谷つた心持になつたのである。然しいつまでも電車停留場の柱の下に立ちすくんでゐるわけにも行かないので、途法にくれながらとぼ〳〵と歩みを日吉坂の方へ向けた。

夏冬とも晴天とさへいへば駒下駄では歩けぬほど砂ほこりのひどい日吉坂は馬鹿げて路幅がひろいのと坂上の空が高く開けて見えるのとで、兩側には樹の茂つ





た崖が聳えてゐるにも係らず坂下のごた〳〵した街から上つて來ると、鵜崎はいつも野原に出たやうな氣がするのである。ましてや丁度初冬の夕陽すさまじく坂上の大空を焦すさま、鵜崎は一層荒寒悲痛な心持がして立止るともなく坂の中途に立止つて行手を見上ると、すぐ目の前に坂の上から砂ほこりもかまはず走るやうに急いで降りて來る一人の女。もし道を讓らずば突當りさうな勢に一歩傍へ寄りながら何心なく其顏を窺ふと、誰あらう屋敷の蝶子ではないか。十一月末の夕方といふに普段着らしい銘仙の上には羽織も着ず外出の襟卷もせず、下駄も竹の皮の鼻緒をすげた庭下駄をはいてゐる樣子。一目見てたゞ事ではないと鵜崎はわれを忘れて、

「もし若奥樣。もし、もし、もし。」

その時目黑行の電車が齒の浮くやうな響に線路をきしりながら砂烟を立てゝ坂

を上つて行く。此の物音に呼ばれた聲の耳に入らぬのか蝶子はそのまゝスタ〳〵行掛けるので鵜崎は追ひつくや否や夢中で後方から袂をつかみ。

「若奥樣、私です、鵜崎です。」

蝶子は立止つて振返つたが卽座には何とも口がきけないらしい。

「若奥樣。申譯がありません。どうぞ御勘辨なすつて下さい。」と鵜崎は稍聲を顫はせ腰と共に膝まで曲げて、どうやら其の場に土下座でもしかねまじき樣子。

蝶子は呆氣に取られたやうに唯ぢつと鵜崎の顏を見詰めた。夕刊の新聞なぞ見る暇もなかつた蝶子は昨夜鵜崎が良人の翰と一緒に富士見町の待合から警察署へ拘引された事なぞはすこしも知らぬ處から、どう云ふ譯で鵜崎がペコ〳〵謝罪つてゐるのか譯が分らなかつたのである。

「鵜崎さん。あなた此れから家へ行くんですか。」と蝶子は暫くしてやつと口をきいた。

「はい……お屋敷へ上るつもりで參りましたんですが、何と云つてお詫をしていいのやら實に面目次第も御在ません。」

「鵜崎さん、あなた家へ行つたら默つて〻下さいな。お願ひですから私にこゝで逢つたことは、義母さんにも義姉さんにも誰にも言はないで下さい。」

「へ。それア言ふなと仰有れば申しませんが、若奥樣、あなたはこれから何方へ被行るんです。」

「ちよいとそこ迄……心配しないでもいゝんですよ。」と云ひさま蝶子は歩き出さうとした。

「奥樣、若奥樣、まア御待ちなすつて下さい。」と鵜崎は狼狽へて再び蝶子の袂を取つた。蝶子はもう駄目だと思つたのか、靜に鵜崎の顏を見返つて、

「私はもう家へは歸らないんですよ。ですから誰にも私に逢つたことは言はないで置いて下さい。私は見捨てられた人間なんですから。良人にも見捨てられるし、實家の人達からはとうに見捨てられてゐるんだし、みんなから見捨てられた身なんですから……。」

皆までは云ひ切れず突然音高く涙をすゝり上げると共に蝶子は片袖を顔に押當た。この樣子に鵜崎は穴へも這入りたい心持。

「みんな私がわるいのです。お屋敷へ行つてゆつくり御詫びをしますから、奥樣、どうぞ、どうぞ、御一緒に……。」

「いゝえ、いゝえ。私は二度と家へは歸りません。書置をして出て來たんですから家へは歸れません。」

蝶子は涙を拭ふと共に再びスタ〳〵歩き出した。鵜崎は又もやしつかり袂をつ





かみたいにも今は通りがゝりのものが二人の樣子に振返るのみか立止まるものさへあると知つてはさうも出來ず、萬一巡査にでも怪しまれてはいよ〳〵大變と途法にくれ、蝶子の行く方へと唯ぼんやりその後について行つた。

蝶子は昨夜徹宵良人翰の歸りを待あかし轆て今朝も九時近く姑の幹子と小姑の俊子と一緒にいつもの樣に茶の間で朝飯の箸を取つたが二人とも翰の事はうんともすんとも云はない。それと共に御給仕の小間使までがぢろ〳〵と見て見ぬ樣に人の顔ばかり見るやうな樣子に、蝶子はたまりかね朝飯の膳をはなれるが否や家を飛出さうと思つた。然し午前は海石先生へ面會を請ふ來客が多いので玄關先から表門は人目につき易く、又勝手口から横町の通用門も午前は御用聞を始め人の出入がはげしい。兎角する中午飯の時刻になつてしまつたが翰は依然歸つて來る樣子もなく、家の人は蝶子の姿を見ればいよ〳〵腫物にでもさわるやうにおぢお

ぢしてゐるので蝶子はます〳〵居づらく窃と一通の書置を殘して庭先から通用門の方へ忍んで行かうとしたのであるが、其の時も折惡しく妹の照子が學校から友達二人まで誘つて歸つて來た賑やかさ。とう〳〵夕暮近くまで家を拔出す隙がなかつたのである。

姑を始め家中のものは此の前翰が夜ふけて歸宅した時蝶子との大喧嘩に恐れをなし何と言慰めてよいものやら慇かな事を言つて却つて心持を惡くさせるよりはと當らず觸らず知らぬ顏をしてゐたのである。それが僻みきつた蝶子には家中のものは皆自分の不仕合せを好氣味だと嘲つてゐるとしか思はれないので、蝶子は翰に對する嫉妬の恨みよりも今は家中のものに對して何かびつくり腰を拔かすやうな事をしてやらなければどうしても腹がいえないやうな氣になつてしまつたのだ。蝶子は書置に、





私はこちらのお家には用のないものだと思ひます。居りましては却てお邪魔になるやうですから逃げ出します。どうぞ死んだものだと思召して下さい。里にも私は歸りません。どこへ行くか私にも分りません。然しどなたへも御迷惑はかけませんから其の事だけは御安心なすつて下さい。私の良人は私の事を妻だとは思はずさういふ待遇をしてくれないのですから私も良人に對しては愛情も尊敬も持つのは不必要だと思ひますお歸りになつたら皆樣からよろしく仰有つて下さい。では左樣なら

捨てられし女より

皆々さま

と認め鏡臺の上へ載せて着のみ着のまゝ家を拔出したが、扨白金の大通へ出て吹きさらす冬の夕風に覺えず身ぶるひすると、案外氣が靜まつて最初は庭の松の木で首でもくゝらうか井戸へでも飛込んでやらうかとまで思ひ詰めた激昂もどこへやら。やがて日吉坂を下りかける頃には往來の電車あたりの人家に早くも灯のつ

き初めたのに、自分はこれからどこへ行つてどうしていゝのやら。蝶子は俄に心細くてたまらなくなつた。

さういふ折から突然鵜崎に呼留められ蝶子は急に再び淵川へでも身を投げかねまじき勢を見せたものゝ然しそれは全く行がゝり上云はゞ虚勢を示したのに過ぎなかつたので、自分の後に鵜崎が途法に暮れながらつき従つて來るのを承知しながら蝶子はもう別に逃げようとも隠れようともせず日吉坂を降りきつて白金志田町から街路の行くがまゝ魚籃坂の方へと歩いて行く。街はもうすつかり夜になつた。鵜崎は人通りの絶え間を見計つて再び擦り寄り、

「若奥様。あんまり晩くならない中私がお伴を致しますからお歸りあそばせ皆様もどんなにお喜びになるか知れません。」

「そんな事云つたつて書置まで書いて出て來たんぢやありませんか。今更のめのめ歸れますか。それこそみんなに笑はれて馬鹿にされます。」

「それですから私がそこの處は何とでもいゝやうに申上げます。お顔の立つやうにします。兎に角、若奥様。私におまかせなさい。」

「困つてしまふわねえ。私見たやうなもの如何なつたつていゝぢや有りませんか。」

「知らない事なら仕方がありませんが往來でかうして御話を伺つて見れば、どうでもいゝと云ふわけには行きません。兎に角お屋敷へ參りませう。」

「いやいやッ。歸るのはいやッ。」と蝶子はまだ取られもせぬ袂をばまるで駄々ッ兒のやうに其の身體と共に振り動かしながら「どうしても誰が何と云つても家へ歸るのはいやッ。」

「弱りましたなア。若奥様、それでは一先私のとこまで……私の家まで

いらしやいまし。もう眞暗ですお風邪でも召すといけません。私の家へ參りませう。さうしてよくお話を伺ひませう。それがよう御在ます。さアさう致しませう。」と鵜崎もいつか子供をあやなすやうな調子になつてゐた。

先刻日暮前には自分の家へも這入りかねて目當もなく日吉坂の方へ歩いて行つた事なぞはもう此の場合兎や角思案する暇なく鵜崎は魚籃坂下からはもう半丁とは隔つて居らぬ○○寺の境内なる借家へと、蝶子をだましつすかしつ漸との事で連れて來ると、かの氣まづい弟の亥之松はもう歸つてしまつたものか格子戸の土間には長靴も見えず、子供の騒ぐ聲もせず、家の中はしんとしてゐる。

「若奥樣、きたない家ですが、さアどうぞ。」と鵜崎はがらりと格子戸を明けると共に大きな聲で、「お慶々々。」

お慶は勝手の三疊で子供と一緒に夕飯をかきこんでゐた最中非常な大聲で呼立てられ口をもぐ〳〵させながら出て來たが若奥樣の姿を見てあまりといへば事の意外なのに澤庵のおくびを袖で覆ふ暇さへなく、「まア。」と云つたなり、鵜崎に對しては佐倉の弟さんが今日半日待つてゐた事も又は夕刊新聞の一件も何も彼も云ひ出すどころの事ではない。今日はあいにく夕方も掃除をせず取り散らしたままの座敷を片づける側から、座蒲團を出すやら火鉢に火を取るやら茶を入れるやら、その最中惡戯盛りの子供が喧嘩をして泣き出すのを叱るやらてんてこ舞の大騒ぎ。それを目の前に見ては蝶子もさすが氣の毒になつてもう死ぬの生きるのと駄々をこねる譯にも行かず夫婦がすゝめるまゝに悄然と床の間の前の座蒲團に坐つた。



## 十五

蝶子の家出騒ぎは鵜崎の身に取つては此の上もない仕合せであつた。この騒ぎがなかつたら鵜崎は拘留の不始末から師家の出入は差留められてしまつたにちがひない。海石翁が二階で夕刊新聞の記事に氣がつきびつくりして夫人を呼んだ時、階下では俊子が蝶子の書置を見付けて一家中俄に騒ぎ出したのである。いつもなら早速鵜崎を呼び寄せる處も今は夕刊の記事から俄の不信用、家にゐるかどうか分らないと云ふので已むを得ず直接電話で大須賀へ聞合はせいよ〳〵蝶子の行衛不明となるや、海石夫婦に俊子の三人額を集めて吐息を漏らすばかり。倅翰の拘留が新聞に出た矢先つゞいて蝶子が投身でもした日には内山家の名譽は滅茶々々である。御歌所の御題に再三入選した俊子の名譽もすたつてしまへば、學習院女子部に通つてゐる照子も氣まりがわるくて當分は通學もできなくならう……どうしたらよからう實に困つた事になつたとばかり途法に暮れてゐる最中鵜崎の妻お





慶が若奥様は御無事との知らせに一同覺えず飛び上るほどに喜んだ。餘程嬉しかつたものと見えて海石は卽座にお慶が夫に代つての詫言を聞き入れたが然し何ぼ何でもその儘にはして置けないので、翰の歸宅を待ち翌日鵜崎と二人を並べて海石はきびしく詰問に及ぶと結局怪しからぬのは我兒の翰ばかり。鵜崎の方はいつも翰の爲めに迷惑こそして居れ決して師家の息子を唆すやうなものではない。いつも小心翼々たる正直な男である事が、詰問の進むにつれていよ〳〵明白になつて來るので、その信用は却つて以前より深くなる譯。譴責は一變して「鵜崎君この後も何分よろしく注意して〳〵れたまへ。又どんな馬鹿な眞似をしだすか知れんから。」と何やら翰の監督を依頼されるやうなお言葉に、「及ばずながら。」と大に面目を施して引下ると、家には雲林堂の亭主相澤が一時間ほど前から鵜崎の歸りを待つてゐて、重ねて一昨夜の詫言を述べ無理押付に三越の切手三十圓を置いて

歸つた。

鵜崎の仕合はこれのみではなかつた。家出騒がすんで一週間ほど經つた或日の朝蝶子の實家なる大須賀家から突然使の車夫が大きな菓子折と書狀とを持つて來た。粗菓と立派に書いて糊入紙で包んだ箱には紅白の水引がピンと結んである。其の間に挾んだ大形の封筒の表には筆太く「鵜崎巨石先生侍史。」裏には「正三位大須賀顯正。」

鵜崎は覺えず坐り直して膝小僧の出る衣服を頻りに引合せながら封筒を丁寧に切り神主が祝詞でも讀むやうに恭しく中なる卷紙をひろげる。妻のお慶は使から受取つた菓子折と良人の手紙を讀む顏とをかはり〴〵に打眺めた。良人は喜色滿面、

「お慶、お使は車屋さんか。お茶を上げな。御返事を書くのだから。おい〳〵、





あの上等の卷紙はどこへしまつたな。そら、毎年盆暮に駒形の團扇屋から貰ふ小箱入の卷紙さ。狀袋も本雁皮のが一緒についてゐる奴……。」と鵜崎は立ちかけた女房を呼び留めながら頻りに机のまはりをさがしてゐたが、「お慶。あつた〳〵。こゝにあつた。」

鵜崎は墨も日常つかつてゐるのでなく、海石翁が揮毫用なる古梅園の名墨の摺り殘りを繪具箱から取出して筆も亦新しいのをおろし、

尊書忝く奉拜誦候見事なる珍菓御惠與被下御禮申述べき樣も無御坐只管感涙に咽ぶのみに御座候尙今夜御屋敷へ御用との仰せ實以て光榮身に餘り候次第夕景仰せに從ひ參邸御機嫌御伺可奉候其砌親しく拜眉の上重て御禮可申上候得共先は不取敢御返書旁々御禮如斯に御坐候尙令夫人樣へも宜敷御鳳聲の段奉願上候

十二月十五日

晋頓首再拜

大須賀正三位様　御執事

鵜崎は文章と共に書體まで全力を振絞つて書いたので大事にしまひ込んだかの緑陰堂の上等の卷紙をも惜氣なく三四度裂き捨てたのであつた。書き終つてがつかりしたやうに息をついたが大分暇取らしたこと我ながら心付いたか鵜崎は返書を手にして二階を下り、格子戸に待つてゐる車屋に手渡して、「若衆さん。お待ちどうだつた。よろしく申上げて下さい。遠い處を御苦勞だつた。」

鵜崎は上框につくばつてゐたお慶を見返り「今夜は大須賀様の御屋敷で御馳走になるんだぞ。」

「さうで御在ますか。」と云つた時座敷の掛時計が十一時を打出した。お慶は耳を傾けながら「それぢや午飯は御惣菜だけでよう御在ませう。」

「うむ。いゝとも。その代晩に飲む奴、あれをおひるに繰上げて貰はう。」





「何です御酒ですか。」

「さうさ。毎日一合ときめてあるんだらう。今日は晩に大須賀様のお屋敷でいただくから晝飲まなければ一合餘る譯ぢやないか。ケチ〳〵せずにお燗をしなさい。もう十一時ならそろ〳〵仕度をしてもいゝぜ。」

「そんなに御急ぎになつたつて、今やつと朝のお膳をふいたばかりです。今朝はどうしたんだかまだ八百屋も來ません。」

「腹はすいてゐない。飯はくひたくない。寒いからお燗をしろといふんだよ。寒いはづだ、大變な風になつたな。」

鵜崎は時ならぬ一合の酒に眼の中まで赤くした。高臺の崖から吹下す風をも今日のみは平氣で近所の床屋へ出掛け髪を刈り髯を削りそれから洗湯へはいて歸つて來ると急に眠くなつて堪まらぬので、足の爪をば半分ほど切りかけたなり汚れ

た座布團を枕に鵜崎はごろりと横になつた、かと思ふ間もなく、

「お父さん唯今。」と着物も顔も土だらけにして學校から歸つて來る子供の聲。

「やアこれアきつと御菓子だよ。お父さん〳〵。この御菓子あけてもいゝの。」

大須賀家から進物の菓子折に素早く目をつけた子供は、鵜崎が目を覺まして欠伸をするひまに危く汚れた手で水引を引張らうとした。

鵜崎大に驚き大喝一聲。

「こらッ。何だ。意地のきたない、これはよそへ上るおつかひ物だ。おやつのお菓子なら御母さんに貰へ。」

子供は一齊におッかさアん――と呼びながらばた〳〵と二階を駈下りた。鵜崎は机の抽斗から鍍金の剝げたニッケルの懐中時計を出して、

「三時半、まだ少し早いかな。」と獨言を云つたが矢張氣が落つかぬと見えてのそ





りのそりと梯子段を下り、「お慶、紋付を出してくれ、そろ〳〵仕度をしやう。三時半だから出掛る中に四時になる。それから巣鴨のお屋敷までどうしても一時間はかゝるだらう。電車のこむ最中だし、日が短いからな。」

鵜崎は着物を着換へて足袋も珍らしく新しいのを穿いた。下駄もいつもの厚木歯ではなく、海石翁のお古を大掃除の折頂戴して來て、正月でなければ穿かない事にしてゐる桐の薩摩下駄、本鹿皮の太い鼻緒のすがつてゐるを穿いた。

巣鴨の停留場で電車を降ると豫想の通り街にはもう灯がちらつき其の邊の屋敷の樹木は黑く空に聳えて凩に枝を鳴してゐた。鵜崎は案内知つた横町を曲り曲つて大須賀家の表門を這入ると敷臺付の玄關の障子に火影の映つてゐるのを見たが、わざと内玄關の方へ廻つて犬に吠えられながら格子戸をあけおそる〳〵「御免下さい。」

十八九の書生が取次に出て鵜崎を十畳の客間に通した。座敷は縦シゲ塗骨障子の紙と畳表の新しいのが一際目に立つばかり四方の長押柱床の間天井建具のいづれを見ても漆か何かで塗つたやうに古色を帶びてピカ〳〵輝つてゐる處から電燈は相應に大きいのが點じてあるにも係はらず何となく薄暗い氣がした。寺の書院へでも通つたやうな此の薄暗さはいかにも世に知られた骨董家の客間らしい心持をさせると共に、掛物や置物なぞ座敷の裝飾品をも又一層重くいかにも稀世の珍品らしく見せるのである。骨董賣買の秘訣は第一が信用第二が最初品物を一見した時の惚込み方とである。大須賀老人はよく此間の消息を知つてゐるので居室と離座敷とは去年の春新しく建直したが表玄關と門構と此の客間だけはわざと古びたまゝにして置いた。そして多年出入の骨董商から内密に依頼されるがまゝ其の店の品物をば自分の珍藏品と取まぜて折々此の客間にかざつて置く。すると鑑定の依頼や何かの用事で老人に面會を求める成金紳士が大須賀家の御座敷にあるものだから大したものに相違ないと頭から崇拜して深く目に留めて歸るのが癖て其の品物に案外な價値と買手をつける絲口になる事がある。さういふ折々老人は道具屋から莫大な禮金を貰ふので此の薄暗い十畳の客間は云はゞ體のいゝ道具屋の店先も同樣である。

書生に案内された鵜崎はそれとも知らず唯只恐縮してすゝめられる座布團をも辭退し煙草ものまず主人の出て來る間引込んだ眼をぱちくりさせて恐る〳〵床の掛物屏風額書棚の上に載せてあるものなぞを遠くから打眺めてゐた。正面の扁額は此の前内山家の結納を持つて始めて使に來た時から見覺えの大久保甲東が閑氣布衣の四字。屏風は文晁が水墨山水の二枚折、七寶の大きな鉢に佛手柑を盛つた床の間には麋鹿に壽老人の一軸。鵜崎は表裝の古びた具合から譯もなく探幽か誰

か何にしても大したものに違ひないとばかり出入の襖際に小さくなつて坐つてゐるので首をのばしても筆者の名までは目がとゞかなかつた。

輕い咳嗽拂と共に襖があく。鵜崎は伸した首を龜の子のやうに引込ませると共にお尻が後の襖へつくかと思はれるまて後じさりして平蜘蛛の如くにつくばひ、

「今朝ほどはわざ〳〵お使をいたゞきまして、其の節は又結構な頂戴ものをいたしまして……。」

「さア〳〵鵜崎さんもつと此方へ御進みなさい。夜中は大分寒くなつて來ました。遠慮なく布團をお敷きなさい。あなた煙草はあがらんのかな。」と親しい調子で大須賀は紫檀の盆に載せた鎌倉彫の卷煙草入の蓋を取て鵜崎の方へ押し薦める。

年齢は六十近く半白の頭髪を五分刈にしおそろしく細長い顔のこけた頰から突出た頤をば此れも半白になつた長い髯に蔽はせた樣子。大島紬の上に重ねた厚





綿の八丈の書生羽織とよく〳〵つり合つていかにも豐かな上品な隱居らしく內々で骨董屋の上前をはねる人とは夢にも思はれない。大須賀は舊幕時代の御茶坊主や御太皷醫者に特有な才智と辯巧と性癖とを餘さず遺傳してゐるので立居振舞から言葉使もおのづからしとやかに、權門に取入る事の妙はその天稟とも言ふべきものであるが又相手によつてはぐつと尊大に構へて壓服させる術をも心得てゐる。

この老怪なる大須賀に取つては鵜崎巨石の如き小心翼々たる人間を活殺するのは實にお茶の粉さい〳〵朝飯前の仕事である。大須賀は生れの正しくない娘の蝶子が家出の一件から鵜崎を此方のものにして置かなければならぬ。此度は無事に濟んだものゝあの蝶子の事だから此後も又どんな馬鹿な眞似をしだして親の恥を世間に出さぬとも測られぬ。その豫防策としては何は兎もあれ內山家の執事も同樣な鵜崎を懷柔して其れとなく蝶子のお目付にして置くに如くはないと、先づ其の

手始めに先夜蝶子が一方ならぬ世話になつた返禮を名として晩餐の馳走に呼び寄せ膳の持ち出される時分を見計らつて珠子といふ若い後妻までを引合せた。

珠子は追ひ出すやうに蝶子を片づけさせた其の發頭人なので萬一離緣にでもなつて歸つて來られてはそれこそ迷惑至極だと女だけに又一倍の取越苦勞から平素あまり客の出入を好まぬ性にも係らず此の夜は心底熱心に鵜崎を歡迎した。

鵜崎は舊□□縣知事正三位勳三等と云ふ肩書ある主人と言葉を交へるのさへ有難くてならぬ處へ一方ならぬ夫人の待遇に全く感涙に咽ばぬばかり。唯一度の御馳走に身命を抛つてもかまはぬやうな心持になつた。八時か九時らしい時計の音に鵜崎は辭して門外へ出ると俄に發する酒の醉に覺えずよろ〳〵と路傍の石につまづいて大事な〳〵桐柾の下駄の角をかいたとも心付かず横町を曲る折には何といふ事もなく屋敷の方を振返つて帽子をとつた。





## 十六

あくる日の朝いつもならば午飯をあてに十一時一寸前頃といふ刻限を今朝はぐつと早く鵜崎は内山家へ出掛けた。鵜崎は海石先生の非常に嫉妬深い人たる事をよく知つてゐるので昨夜先生には無斷で大須賀家へ行き馳走になつたと知れゝば必ず御機嫌を損ずるにちがひないと、酒もすつかり醒めた今朝になつて急に心配でたまらなくなつた。通用門をくゞると直ぐにも二階へ上らうと思つたが表玄關に靴が一足車が一臺あるのを見て已むを得ず茶の間の方へまはり「鵜崎で御在ます。」といひながら靜に襖を明けると奥樣も俊子さまもお居でにならない。唯一人小間使のお秀が茶棚からお客用の茶碗を取下して茶をついでゐる處なので。

「お秀さん。お客樣かい。」

「えゝお醫者さま。」

「お醫者。どなたがお惡いんだ。先生か。」

「いゝえ、若奥樣。」と云つたまゝお秀は茶托に茶碗をのせ若夫婦の居間になつた奥の間の方へといそがしさうに立つて行つた。

取殘された鵜崎は譯もなく胸を轟せ悄然茶の間の隅へ坐つたが、がらりと障子の明く音にびつくりして振返ると翰が突立つてゐるので、「お早う御座います。」とわざと疊へ手をついた。あの一件以來鵜崎は自分一人が好い兒になつたやうな具合から翰に對しては誠に氣まづくてならぬので顏さへ見れば馬鹿丁寧に御辭儀ばかり。すると翰の方でも至極冷淡に折々は鵜崎が辭儀をしても知らぬ顏をしてゐる事さへあるので何となく底氣味わるくは思ふものゝ結局以前のやうに「後で僕の部屋へ來てくれたまへ。」と例の迷惑な相談を掛けられぬのを何よりだと內心





喜んでゐた。されば今しもお秀から聞いた蝶子が病氣の事も此方から先には口を出さぬ方がとそのまゝ知らぬ顏に默つてゐると、翰は何やら緣側の方を見返りながらヅカ〳〵と鵜崎の身近に進んで氣味わるく聲をひそめ、

「鵜崎君。君は其後身體は何ともないか。」

「へ。」と此方は意外の問ひに狼狽して、「へい。お蔭さまで……。」

「さうか、それア結構だ。」と翰はまたしても緣側の方へ氣を配りながら更に聲をひそめ、「僕は實に弱つてゐるよ。先年にやつた處が又わるいんで實に閉口してゐるんだ。醫者へ行きたいんだが一件以來僕は一文なしで醫者へも行けない。女房がゐなければ時計でも何でもポンにやるんだが今ぢや其れも出來んしさ。君、氣の毒だが十圓借してくれ。十圓。きつと返すよ。」

翰は言葉の調子もせはしく詰め寄つてもう手を出さぬばかりの樣子。鵜崎はこ

んな處で翰とひそ〳〵話をしてゐる處を先生に見られてはと氣が氣でない。又こで拒絶しては重ね〴〵坊ちやんの怨みも空恐ろしい氣がするので其の事の眞僞はいざ知らず快く懷中の紙入を出して内の方をすつかり見せながら五圓札に一圓札二枚持合せただけの紙幣を渡した。

其時奥の方で手の鳴る音と共に大奥樣幹子の聲。「お秀、先生のお歸りですよ。」つゞいて緣側をば此方へと醫者の立出る足音に鵜崎は勝手の方へ翰は紙幣を袂に便所の方へと姿をかくした。

鵜崎は門内の砂利を輾つて醫者の車のかけ去る物音に時分を計つて再び茶の間へ顏を出すと夫人幹子に俊子ばかりか海石先生までが坐つて居られたのに、これは事態容易ならずと又もや胸をはづませ唯敷居の上に手をつくと海石は、

「やア鵜崎か。大須賀さんへ電話でお知らせ申せ。蝶子が妊娠したさうぢやから





な。」

「若奥樣が御妊娠……それはそれはお目出度うございます。」

怖氣のついた鵜崎は最初大須賀と云ふ一語にぎよつとした矢先一度に安心すると何やら腰でも拔したやうに卽座には立ちも得られなかつた。靜子は嬉しさうに、

「さつきはほんとに惚りしました。朝御飯の最中急に胸が痛いつて言出して顏の色が眞靑になつたぢやありませんか。惡阻ならば何もそんなに慌忙てゝ御醫者を呼ぶほどの事でもなかつたのに。」

出戻の俊子は妊娠の經驗もなく又蝶子とはもと〳〵仲がわるいので老父母の喜ぶさまをば寧ろ不平らしく冷かに打眺めてゐた。

「翰はどうした早く知らせてやれ。」と海石は立上りながら、「鵜崎、大須賀さんへ電話をかけたら御苦勞ぢやが日本橋の銀行まで行つて來てくれ、今日は忘れとつ

たが砂糖會社の拂込ちやッたから、受取書を貰つてな。」

「かしこまりました。」

鵜崎は當座預金の通帳と印形とを受取り門を出て横町から表通へ來かゝると後から「おい〳〵。」と呼ぶものがあるのに振返つて見ると翰なので、道中胡魔の灰につかれたやう思はずぞつとして通帳の包を内懐中へ入れ替へた。然し翰は事實病氣で弱つてゐるらしくとぼ〳〵と歩いて來て、

「どうもいかん、づき〳〵しやがつて歩けない。君は實際何ともないか。」

「何ともありません。」

「運がいゝんだな。僕はどこで傳染つたのか知ら、兎に角藝者は危險だ。君も用心したまへ。ひどい目に逢ふぞ。」

「此から何方へお出かけです。」





「醫者さ。先刻君に借りたちやないか。家の醫者にや氣まりがわるくつて見て貰へないやね。仕方がないから麹町の愛養病院へ行くつもりだ。番町にゐた時分一度見て貰つた事があるからね。」

「番町におゐでの時分、そんな病氣にお罹りになつた事があるんですか。ちつとも知りませんでした。」

「赤門へ通つてゐる時分だよ。よく一緒に遊んが田島と云ふ奴がね入院したんで見舞に行つたついでに僕も見て貰つたのさ。一度やると後は大丈夫だつていふから安心してゐたんだが、驚いた。女房がゐるだけに具合がわるい。」

「御養生なすつて早くお直しにならんといけません。若奥様は御妊娠だといふ事ちやありませんか。」

「うむ。ポテレンだとさ。鵜崎君いさゝか時期を失したね。此間君に相談した蝶

子の私生兒問題だな。あれも今日になつちやもう仕樣があるまいな。今の處彼これ云出しても僕の方にも例の一件で聊かひけ目があるしなア。」

鵜崎は迷惑と不審との兩方から覺えず翰の顔を見詰めた。翰は獨言のやうに、

「ポテになつちまつちやもう仕樣がない。それに考へて見れば蝶子も可愛さうな女だからな。」

大通をいつか電車の停留場へ來た。翰は立止まると袂から朝日の袋を取出して、「君、煙草はどうだ。」

「ありがたう御在ます。」

「遠慮せんでもいゝよ。これア蝶子の小遣で買つた煙草だ。君、僕のワイフは實に不思議だね。僕は今日まで一文もやつた事がない。それだのにお白粉でも香水でも皆自分の小遣で買ふ。不思議だよ。實家からは今だに時々郵便爲替で小遣を





送つて來るんだ。だから彼女はいつも金持だ。ところが僕の方はあの一件で東洋新聞の方も軍國社の方も其れから野球倶樂部の方も四方八方一時に敬遠主義と來たちやないか。實にみじめなものだ。それだから今の處大にワイフを優遇する必要がある。法學士もかうなつちや實に哀れだな。はゝゝゝは。」

鵜崎は呆れて返事も出來ない。

「はゝゝゝは。」と翰は獨で笑ひつゞけた後、「それにね、君、彼女は色が黑くつて縮毛だらう……素性なんか面倒臭い。何うでもいゝや。今の處秘密を知つてゐるのは僕と君だけなんだからな。」

やつと電車が來た。明いた席が離れてゐたまゝ二人は別れわかれに腰をかけ鵜崎は金杉橋翰は赤羽根橋の乘換切符を切らした。

## 十七

緣起棚を後に薄暗い帳場の長火鉢に頰杖をついた愉快のおかみ、寢衣に半纏、髪もいぼじり卷のまゝ沈みきつた調子で、「花ちやん、わたし實は思ひ切つてもう一遍商賣に出やうかと思つてるんだよ。今日はもう二十三日ぢやないか。もうすぐお正月だつて云ふのに何時までものんべんと斯うしちや居られないもの。」

「姉さん、ほんとにもう如何しても許可にやならなさうなの。」と呑み掛けた長煙管の手をとめて氣の毒さうに姉お町の顏を見たのは妹の小花である。小花はかの一件で五日間の拘留を一日一圓ヅゝの罰金にして貰つて蠶者家の二階へ引籠つた後は下町とはちがひ然ういふ事は折々ある山の手の事とて今では相變らず商賣に出てゐたが待合愉快の方は其の時かぎり營業禁止になつた。金主の雲林堂は勿





論の事組合事務所の方からも今だに引續いて其の筋へ嘆願の運動はしてゐるが、もう彼れ此れ一ヶ月ばかりたつた今日になつても一向許可の模樣がない、といふのは雲林堂が三日に上げず兜町の仲間と多い時には同勢七八人愉快の二階を花の引き處にしてゐたのが早くも其の筋へ知れてゐたが爲めとやら。

「どうしても駄目らしいんだとさ。昨日も事務所の先生が來てどうも困つたつてさう云ふんだよ。あの方の間違ひならいくら長くつても十四日の停止で禁止にやならないんだけれどお花の事があるから六ヶ敷からうつて云ふんだよ。」

「姉さん、あの時にや誰もお花なんぞ引いてやしないぢやないの。」

「あの時はさうだけれど、普段平素旦那がいけないぢやないか。あの晩の事もつまりそれが原因なんだとさ。」

「姉さん、旦那はどうしようッて云つてるの。商賣に出てもいゝつて云ふの。」

「どうでもいゝんだらう。此頃は何か相談してもちつとも身を入れて聞いちや下さらないんだよ。當分素人で遊んでゐりやアいゝぢやないかつて、さう云ふんだけれど、それぢや行末が心細くつて仕樣がないやね。此間中からどうも怪しいんだよ。淺草の方へ出來たんだつて云ふ話だけれど……。」

「だから男はいやねえ。姉さん、先がそんな風ならもう構はないぢやないの。此の家は姉さんの名前で商賣してゐるんでせう、今の中に早くどうかしちまつたらいゝぢやないの。」

「花ちやん。お前さんにもまだ誰にも話をしないんだけれど、此の家はとうに旦那が抵當に入れちまつたんだよ。それも御商賣の事か何かで融通したとか云ふのならいゝけれど、まさかの時私にどうかされやしまいかと思つてさ。電話までお友達からお金を借りたやうにして抵當に入れた事を私ア其のお友達――兜町の矢さんね、あの人から聞いてあんまりだと思つて泣いた事があるんだよ。」

「まア隨分薄情な人ねえ。」

「考へて見ると私アつく〳〵情なくなつちまふ。」と姉のお町は寢衣の袖で眼を摺り始めた。小花は言ひ慰めたいにも言葉なく同じやうに俯向いて吐息をついたが思出したやうに、

「姉さん。お春さんは。」

「何か用かい。」

「いゝえ、用ぢやないけれど、いやに靜かだから……。」

「もう居ないよ。昨日の晩返しちまつたんだよ。商賣がなけれアお米の高いのに女中を置いたつて仕樣がないからね……。」

「ほうとうね。だけれど何だか陰氣になるわね。母さんもどつかへ行つたの。」

「音羽の先生へお伺ひを立てに行つたよ。もう歸つて來るだらうよ。大變にあらたかなんだとさ。」

「姉さん、それぢやほんとうに出るつもりなの。」

「だからお伺ひを立てにやつたんだよ。どつちにしても春には間に合ふまいよ。もう斯う押詰つてしまつちや……。」

「姉さん。何處……此の土地。」

「何ぼ何でも此の土地ぢや稼ぎにくいねえ。今までおかみさん〳〵て云はれてゐたのが出れば此方から皆に挨拶しなくつちやならないから。どこがいゝんだらう。牛込も先に出てゐたし……。」

「姉さん、私も外土地へ行くわ。何だか心細くなつちまつた。」

「お前さんは。折角これまで辛棒したんぢやないか。今の家見たやうな樂なとこ





は捜したつてありやしないよ。お前さんがまるで御主人も同樣ぢやないか。」

「それだから辛棒したのよ。私さうでもなけりやア姉さん、全く此の土地にや居られやしなかつたわ。今だつてお湯だの髮結さんだの大勢藝者衆のゐるとこへ行くと何となく顏を見られるやうで氣まりが惡くつてたまらないんだもの。」

拘留の一件を言出されては姉も吐息をつくより外に言葉もない。

「世間はいろ〳〵ねえ、姉さん。家の御主人は來年早々旦那のところへお嫁入するんですとさ。籍まで入れたほんとの奥樣になるんですとさ。」

「それぢや藝者家の方はどうするんだらう。」

「どうするんだか。一昨日からお揃ひで熱海へ行つてるわ。だから家は女中と私ぎりよ。」

時計が四時を打出した。小花は煙草入を帶の間へしまひながら、「母さん遲いこ

とね。わたし何ぼ何でもあんまり出歩いてるやうで惡いから鳥渡家へ歸つてまた遊びに來るわ。」

立掛けた時あはたゞしく勝手口の障子を開けた母親。下駄も拔がぬ先から、「お町や大急ぎだよ。旦那が花ちやんのお客樣と表の煙草屋さんで煙草を買つておゐでだよ。お寄りになつたんぢやないのかい。」

「いゝえ。」と云ふより早く立掛てゐた小花は狹い勝手口をば母親を突退けるやうにして路次の間道を表通へ駈出すと、丁度雲林堂の亭主相澤と鵜崎巨石の二人が煙草屋の店先から九段の方へと歩き出した行手の正面。

「旦那。まア素通りですか。先生も隨分ねえ。」

小花は急込んで聲まで少し顫せたが雲林堂は落ち付いたもの。

「停留場まで先生をお送り申して、それから寄らうと思つてた處だ。年の暮で身體が幾個あつても足りやしねえ。」

「姉さんが大變心配してるわよウ、旦那。」

「先生、困りましたな。どうしませう。」

「私はこゝで失禮しませうよ。君はおかまひなく　。」

「あら、先生、それぢやあんまりよ。あなた。」

鵜崎はもう二度と待合へは足を踏み入れまいと怖氣がついてゐるのであるが、何の彼のと往來端で小花に付纏はれるのも又迷惑なので人目を避けたいばかりに横町へ曲つた。曲ればすぐ兩側とも待合のつゞいた新道の出口まで一同を迎ひに來てゐたお町。半纏だけ羽織に取換へた寢卷の前を押さへながら馳け寄つて、

「先生、先日は・・・・。」と云ひかけたが此の先日は何よりの禁物とすぐ心付いてか獨りで慌忙てゝ「先生、先生、どうぞ上り花でも召上つてゐらしつて下さい・・

……。」

あたりの待合では冬の日の短かさにもうそろ〳〵門口へ水をまいたり鹽を盛つたりしてゐるのに、愉快の門のみは空屋も同然扉が閉めてあつて街燈の火屋に空しく其の名を留めるばかり、冬枯れの柳がいかにも淋しく哀れに見えた。

「これぢやどうにも法がつかない。勝手口からお通り下さいぢや何ぼ何でもあんまり失禮だ。お町、どこか心安いとこはないか。お向うはどうだ。」と雲林堂は立止つて皐月と書いた街燈の出してある向側の待合の方を見返つた。

「相澤君、僕の爲めならそれにや及ばん。今日はどうせゆつくりしては居られないんだから……。」

「それぢや上花だけでも、ほんとうに失禮なんですけれど。それから、ねえ、花ちやん、何處がいゝだらう……。」





さうねえ、家のお隣の明月さんはどう……。」

門口でさう何時までもごた〳〵しては居られないので、鵜崎も雲林堂も仕方なく開放したまゝの勝手口から一先内へ上つた。然し二階はそれ以來謹慎の意を表する爲め雨戸がしめてあるといふ始末に、一同はごた〳〵と長火鉢のまはりに坐つた。

外から這入つて來ると帳場の暗さは又一層人の顏も見えわかぬ程である。鵜崎は直樣當夜の騷ぎと留置場の薄暗さを思出して着たまゝなる二重廻の襟に首を縮めて身ぶるひした。相澤は長火鉢の火を搔きほぢつて、

「お町、もつと火をおこさないか。それから早くお燗をつけな。」と云つたが、鵜崎はどうしたのか止めもせず、小花が持出す上花をも取上げず唯ぼんやりと考へ込んだ。

空恐ろしい氣がすると共に鵜崎は其後の成行を思返して俄に不思議な氣がし出したのである。翰と自分の二人が此家の二階から時雨のびしょ〳〵降る中を警察署へ引致されて留置場で一夜を明した、それが爲に蝶子が書置をかいて家出をした。蝶子が家出をした爲めに自分は急に大須賀家へ出入をするやうになつた。それからまだ一個月もたゝないのに大須賀家への出入から茲にこの押詰つた年の暮今まで夢にも思はなかつた開運出世の道がついて來た。此の分で行つたら來年の春にはどんな福の神が舞込んで來るのやら。全く不思議でなくて何としやう。

二三日前の事である。鵜崎は突然海石先生から大須賀老人が手紙で足利侯爵家の寶什取調に就いて人員不足の處から貴下の御高足鵜崎巨石君をば侯爵家々政事務所の臨時雇員に御借用申したいが先生の御内意如何に候哉幸に御許容あらば何卒先生より巨石君に其趣御承諾あるやう御話が願ひたいと言つて來たが巨





石お前はどうする考へぢやと相談された。鵜崎は何事も先生の御下命次第との答に海石は別に不承知を云ふ譯もない。其の日鵜崎は大須賀家へ出頭して厚く禮を述べた。大須賀老人は先夜の馳走以來兩三度の會見に小心翼々とした鵜崎の人物をすつかり見拔いて此れなら大丈夫だと此頃窃に内議の決定した侯爵家寶物賣立の事務について己が腹心のものとして巨石を使ふ事にしたのである。寶物賣立の事は侯爵家では何の相談もない先に既に去年の秋頃道具屋連中が頻に騷ぎ立てたため新聞にまで噂された事があつたが、その時には大須賀が大反對を稱へて其のまゝ中止させた。大須賀は寶什の賣立をば一世一代金儲のしをさめにしやうと深く畫策する處があつたからである。それは一先空評判に世間の人氣を煽らせて置いてぢり〳〵と陰から道具屋をいちめる一方にはゆつくりと手を廻して寶物下調のついでに盗んでも知れなさうなものは盗めるだけ盗んで自分の家藏品と混同さ

せてしまはうと考へた事である。もと〳〵足利家のお抱醫者であつた大須賀の家には拜領の物品も少くないので、よしんば怪しいと睨むものが出て來た處でどうにでも云拔けられる。大須賀はそれや此れやの事から此頃しきりに自分の手先に使ふ腹心の人物を物色中鵜崎を見てこれに白羽の矢を立てた譯。そんな事とは露知らぬ鵜崎は侯爵家から月給六拾圓大須賀の手元からは自家の所藏品もついでに目錄なんぞを作つて置いて貰ふから別に四拾圓と云ふ話に唯只有難く忝く、事務は來春五日からと云ふ事であるが、早速昨日は四谷坂町なる家令關山何某の家に名刺を置きに行き今日は又砂土原町なる侯爵邸内の事務所へ顔を出しに行つた其の歸途、屋敷の土塀について急な坂をば堀端へ出るとすぐ雲林堂の店先なので別に用事はないが通かゝりに立寄ると主人相澤は丁度出掛けやうとする處、そのまゝ話しながら新見附を拔けて知らず〳〵富士見町の電車通へ出るや否や忽ち小





花に目つかつてしまつたのだ。

鵜崎は來春まづ四五月頃にならうと云ふ寶物賣立の事については堅く秘して口を噤んでゐたが、すると雲林堂は道々頻りに自分の計畫を話し出した。この十月以來砂糖株と紡績株とでざつと小一萬圓儲けた處へ地方の金主もついたので會社組織で銀座か上野廣小路邊へ當代新畫展覽卽賣場を開かうといふ計畫中來年早々株式の募集をする手筈である。さうなつた曉には鵜崎先生に新畫仕入の方の監督でもして戴ければと云ふのである。

鵜崎はどこへ行つても餡ころ餅で頰邊をたゝく樣な話ばかりなのに今まで空虛な財布が俄に重くなり酒なんぞはどこへ行つても呑めると云ふやうな大きな氣にもなれば、又どうやら狐にでも化されて目が覺めれば何もかも烟になつてしまふのではないかといふやうな心持もする……。

「先生、お茶のかはりにどうぞ一杯。」といはれて鵜崎は始めて我に歸り今更らしくあたりを見廻した。

一同杯を取遣りしながら何處の待合かよからうと再びお町に小花と母親との話が女だけになか〳〵一決しないのを幸ひ鵜崎は兎に角今日はと雲林堂を殘して營業禁止の待合愉快の帳場を立つたが、もとより目のない酒の事知らず〳〵一合ほど呑んでしまつたので眼の緣はもうほんのり赤くなつてゐた。

小花は送り出すとも又尾いて行くとも何方ともつかぬ態度で同じく勝手口から下駄をはき、「ウーさん、九段でお乘りになるんでせう。わたしも家へ歸るんだからそこまで一緒に行きませう。あなた。きたないけれど路次を拔けて行きませうよ。そんなら一緒でもかまはないでせう。」

鵜崎は小花がいくらついて來ても愉快の家さへ出てしまへばもう大丈夫だと安





心したものか今はさして迷惑な顏もせず導かれるまゝに新道から路次を拔けて又向うの新道へと、いつでも同じやうな待合つゞきの軒下を歩いて行つたが、すると唯ある待合の門口に幌をかけた車が二臺。狹い新道は下した梶棒の間でも跨がねば通れさうもない處から鵜崎はどうしやうかと立止まる途端、待合の格子戸がガラリとあいて二人連の男女。格子戸からいきなり幌の内へと飛込むやうに身をかくさうとする。此方も元より人に顏を見られたくない場所柄とてびつくりして後じさりすると後から知らずに一歩踏み出した小花にぶつかりその反動で微醉の鵜崎はよろ〳〵と前の方へよろけ出して梶棒へぶつかつた。車がぐら〳〵と動いたので丁度片足を蹴込へ踏み載せやうとした女の客は踏みそこなつて聲を立てながら幌へかぢりつく騷ぎ。深く半面をかくしたその肩掛はころ〳〵と轉がつて來た鵜崎が古帽子の上に落ちる。こゝに相方圖らず顏を見合せあつと叫んだが女の

方は早くも幌の中へ身をかくしたので車はそのまゝ何の事もなく曳き出された。

「ウーさん。どうなすつたのよ。」と小花は白痴のやうにいつまでも口をあいて茫然と車の後を見送つてゐる鵜崎の樣子に、「どこか御怪我でもなすつて。」

鵜崎は歩き出したが拾つた帽子も手にしたまゝ、「あゝ實に弱つたな。大變な人に目つかつてしまつた。だから二度とこんな處へは來まいと思つてゐたのに、あもう仕樣がない。」

小花を見返つた目には涙と共に云ふに云はれぬ憤怒の色が現はれた。何の事やら仔細は分らぬが容易ならぬ鵜崎の樣子に小花はおそる〳〵、「あの女の方御存じなの。」

「御存じどころか……實に弱つなた。藝者を連れてゐる處なんぞ見られちや實際僕はもう立瀬がないんぢや。」





「あら。だつてあなた向の方も男と御一緒よ。お連込のお客樣ぢやないの。あなたの顏を見た時の樣子ッちやなかつたわ。」

「男の方はじんな人だつた、白い髯のある御爺さんぢやなかつたか。」

「いゝえ、あなた。金緣目鏡かけた奇麗な若い人だつてよ。」

「ふーむ。」と鵜崎は首をかしげながら立止つてしまつた。

車へ乘つた婦人といふのは大須賀顯正の若い後妻であつたのだ。鵜崎はわが身の信用のみを氣にかけ向うの事情なぞは全く思ひを廻す餘地がなかつたのであるが思返せばいかにも不思議だ。どういふ譯で今頃待合なぞへお出でになつたのであらう御一緒の若い男と云ふのは誰であらう……鵜崎は立止つて彼の待合の方を振返つたがもう車も何も見えやう筈はない。いつか新道を拔けてしまつて別の横町を歩いてゐる。と氣がつけば、ふと見上る片側の石垣から狹い横町へと長く枝

を出してゐる大木の形にどうやら見覺えがあるのも道理。此の秋芝へ引越すまで十年間住み馴れた家のある横町である。

「あなた。すぐそこの家ですから鳥渡寄つていらつしやいよ。あら、さうだつたわ。私の家はウーさんの先に居らしつた家だつたわねえ。丁度いゝわ。あなた。御主人は熱海へ行つて家は私と女中きりなのよ。鳥渡寄つて御覽なさいよ。」

冬の日は折からの黄昏時、明いやうな薄暗いやうな妙に目のちらつく時である。不意の驚愕と心配と不審とに甚しく精神の混亂した鵜崎は一層夢のやうな何とも云へぬ心持。引かれる袖を拂ふ力もないらしく全く氣の抜けた人のやうに小花の云ふがまゝに唯ぼんやりと自分の舊宅へ上つた。

## 二十





その夜鵜崎は案外早く八時頃家に歸つた。身も心も疲れきつて九時を打つか打たぬ中お慶に床を取らせて寢やうとした時、「おたの申します。」と呼ぶ來客の聲。

取次に出たお慶が立戻つて來て差出す名刺を見るとまるで心當りのない知らぬ人である。

「間違ひぢやなからうな。」

「鵜崎先生にお目にかゝりたいと仰有いました……。」

「ふーむ。さうか。どんな方だ。」

「眼鏡をかけた洋服をきた色の白い若い方です。」

「なに、眼鏡をかけた若い方……。」と鵜崎は覺えず聲を高めたがお慶の手前やつとさあらぬ體を粧ひ、「兎に角お通し申してくれ、二階がいゝ。」

鵜崎は先に二階へ上つて待つ間もなくお慶に案内されて上つて來た來客。年の頃は二十七八。背廣の洋服を着て油で分けた頭髪をばテカ〳〵ひからせた色白の男である。

「始めてお目にかゝります……。」

「は。私は鵜崎で御在ますが……。」

「昨年まで私はあの……大須賀さんのお屋敷に書生をして居ました。」

「大須賀さん……。」

「は……。」

二人は默つてしまつた。相方ともに電燈の光をいとふやうに横を向きながら又互にそつと樣子を窺ひ合ふ。色白の男はやがて決心したもの〻如く少し聲を顫はせ息を切らして、





「外の事でもありません。今日はあの　途中の事で……往來の事で……まことに失禮をしました……お詫びに伺つたのです……此れは輕少ですが　。」と云ひながら商品切手を入れたらしい薄い桐の箱を風呂敷から取出して鵜崎の前へ差出した。

「いや、お詫ならば私の方から伺はなければならないのです。こんな御心配をなすつては……却つて困ります。これはどうか其方へ……。」

「それぢや私が困ります。これはどうぞ。どうぞ……。」

「然しどうも頂戴する譯がないですから　。」

「いや、どうぞ、其樣事を仰有らずと、どうぞ〳〵〳〵。」と今は夢中で桐の箱を突付ける男の聲はいよ〳〵顫へ、手をついて鵜崎の顏を見上るその眼は睨むやうに据つてゐる。

鵜崎は氣を呑まれ座布團から後退りしながら、「どうも困りましたな。」

「どうぞ〳〵。」

「困りましたな。困りましたな。」

「どうぞ〳〵。私はお受取り下さらなければ私は歸れませんから……歸れません からどうぞ、どうぞ。」

男の樣子は稍物狂はしいばかりになつた。鵜崎は遂に止む得ず、「何の事ですか さつぱり譯が分りませんが。それでは一先お預りして置く事にしませう。」

男はやつと安心したらしく、「それではいづれ又お伺ひを致します。それではど うぞ今日のことはあれなり、どうぞ、何にも御存じない事に……それではどうぞ 何分よろしく。」と座を立つた。そして格子戸をあける時再び、「何分よろしく。」と 繰返して寺の門をくゞるが否やどうやら石段をば駈け下りたらしい樣子であつ



た。

鵜崎は何に限らず不時の收入は女房に知らせず内所で銀行に預けてしまふので 無理押付にされた商品切手の箱もその夜は熨斗のついた包紙のまゝ机の抽斗にし まひ、一家中枕を並べた下座敷の夜具の中へ這入つたがなか〳〵寢つかれない。 夜半の二時頃便所へと起出たまゝ窃と二階へ上り机の抽斗から薄い桐の箱を取出 し中を改めると金五圓と書いた九段下の或菓子屋の切手なので、すこし安心した らしく其儘元のやうに蓋をしやうとして誤つて箱を落すと切手の下から何うやら 紙幣らしい紙片が見えた。これは不審と再び取上げて切手を取れば其の下には正 に百圓札……然も一枚二枚三枚まで重ねてある。鵜崎は電燈をば紐の引切れるほ ど力まかせに引下げて紙幣の裏表を改めたが冗談に入れた玩具の紙幣ではないら しい。鵜崎は恐るゝ如く急に身のまはりを見廻し暫くは茫然としてゐた。

寢床へ歸つてもいよ〳〵以て寢就かれるものではない。夜が明け電燈が消える頃始めてうと〳〵として眼をさますと子供はとうに學校へ行つた後丁度八時頃であつた。鵜崎は朝飯をすますや否や商品切手に正金三百圓を懷中にして一目散に巣鴨なる大須賀邸の門前まで駈けつけたが急に又考へ直したらしく幾度となく塀外を行きつ戻りつした後市ヶ谷の雲林堂へと志した。鵜崎は思案にあまつて百圓紙幣の始末を誰にか相談したいと思ふものゝ差當つて雲林堂の亭主より外にはこれと云つて差支のない知己が思出せない。然し電車の中で鵜崎は再び思返し今度は直接昨日車にぶつかつた待合へと見覺えた新道へ這入つたまではよかつたが、昨日はその場の周章狼狽に今日となつては何の家であつたのやら、いづれも同じやうな見付に見當がつかなくなつた。もう斯うなつては小花を呼んできくより道がないと少し躊躇ひながらも決心してまづ横町をば昨日立寄つた小花の家の





前まで歩いて行つた。

すると小花は丁度起きた處と見えて細帶一つのだらしもないなりをも構はず二階の雨戸をあけながら往來を見おろしてゐた。ぴい〳〵笛を鳴らして行く羅宇屋の車の外往來は丁度人通りが杜絶えた處なので、小花はすぐに鵜崎の姿を見つけて、

「あら、嬉しい事ねえ、さア御上んなさい。」と呼ぶより早く二階をかけ下り表の格子戸を明けて顏を出した。

小花は昨日の夕方鵜崎が「また出直して來やう今日は全くいそがしいのだから來られたら明日にでも屹度來る。」とその場を胡魔化して歸つた今朝の事とて、何と云ふ義理の堅い賴母しいお客だらうと其の瞬間しみ〴〵嬉しい氣になつて格子戸に立寄る鵜崎の身體に女中の前も憚らず抱きついた。小花はその姉と同じく又

かういふ山の手の賤妓一般の例に漏れず年十五六になるを遲しといづれも本所深川淺草邊の貧民窟から周旋屋の手に狩出されて女工にあらざれば藝者と先天的に運命のきまつてゐる女の一人である。いづれにしても抱えた主の使役と命令と其の周圍の習慣に盲從して奴隷の生涯を送るやうに出來てゐる女の一人である。影ではいつもうるさいほど不平を云ひ愚痴をこぼしながら人に惡意地をつけられない限りには自分一人ではどうしやうとも考へのつかない意氣地のない愚鈍な女の一人である。いくら馴れた馬でも時には荒れて人を蹴る事もあるやうに急に逃げ出したりあばれたりする事もないではないが其の結果は先へ行つて矢張又別の人の喰物になる女の一人である。小花は長年この商賣に馴れきつて今ではさして辛いこともない代り別に面白いといふ事もなくお客とさへ云へばもとより誰彼の差別もない商賣柄老若美醜に對する好き嫌ひの念も全く失せてしまつたが流石女の



身の行末を思へば心細い氣がすると見え、どんな不男でもいゝから此人は私のお客だといくらか氣をゆるして我儘の一つも云へるやうな人が一人ほしい。だましてお金を取らうといふほどの謀計は元よりないので、綺羅を張つて大勢にちやほやされる危險なお客よりも唯おとなしい親切な人であればよい。そしてよく〳〵困つた場合に其の人から小遣錢でも貰へれば結構だと至極ひけ目な望みを起してゐた。これには最初白山で逢つた時から何となく鵜崎先生がいゝやうに思はれてならなかつたのである。遊びに來る度數の少いのが却つてます〳〵頼母しく思はれてゐた矢先、昨日の約束を堅く守つて今日は向ふから自分の家さで迎ひに來てくれたのかと思へば、もう日頃の望みは叶つたのも同樣である。小花は嬉しいあまり拘引の一件さへ此の人と一緒だつたのは矢張深い因緣ではなかつたのか知ら。俄にそんなやうな心持さへして二階の座敷へ差向ひに坐ると共に膝の上に男

の手をぎゆつと引寄せ、

「ウーさん、ほんとうによく來て下すつたわね。ゆつくりしてッて頂戴よ、今日は。今お出を入れて來ますから。ねえ、あなた。此れがほんとに私の家で、あなたが旦那だつたらどんなに嬉しいだらう。」

然し鵜崎は唯きよろ〳〵と四邊を見廻すばかりである。昨日の夕方よりも今日は朝だけに猶更はつきりと目に映じる二階のさま……以前自分の古机が置いてあつた跡には小花の簞笥が据ゑられたばかり疊の上の燒焦しから押入の唐紙や壁の腰張に繪具のはねかつた跡まで十年間自分が住古した生活の跡はそつくり其儘殘されてゐる。鵜崎は何とも知れず深い思ひに沈められた折から茶を汲みにと下へ降りて行つた小花のやがて再び上り來る足音。それが不圖其の瞬間お慶が上つて來るのであるやうな心持がして鵜崎は見返るともなく見返れば、もとより別人な



らぬ小花の手早く髪を撫でつけ薄く白粉さへつけた姿、十人並より以下の容貌も鵜崎の目にはお慶の馬面と比較して實にびつくりする程艶麗に見えた。

「あなた。どこにしませう。お隣の明月さんにしませうか。」

鵜崎は默つて不審さうに小花の顏を見てゐる。

「ねえ、あなた。こゝでゆつくり二人ッきりで御飯でも食べたいわねえ。」

鵜崎はだしぬけに「昨日車の置いてあつた家はどこだ。」

「あなたの躓いた處？あれは滿壽村さんよ。お弘めした時から一番よく掛けてくれる家だわ。靜かでいゝ家よ。」

「お前、よく知つてゐるのか。あの家は。さうか、さうか。それぢや昨日のお客さまの事……男の人はどう云ふ人だか、お前内所できいて見るわけには行かないだらうか。」

「あのお連込みの方……。」
「何、連込み……」
「あの素人さんの事でせう。」
「どうして待合なんぞへお出でになつたんだらう……。」
「戀は思案の外よ。逢ひたけりやア仕方がないわ。誰だつて同じ事だわ。」
「……」
「あすこの家は年を取つたおかみさんと娘さんきりでせう。だから能く連込のお客さまがあるわ。いゝとこのお嬢さんで自働車の運轉手とこつそり遊びに來る方があつてよ。藝者なんぞより近頃の奥様やお嬢さんの方が……それア大膽なものよ。」
「ちやア矢張さうかなア。實に驚いた。」



「私がうまく聞いて見るわ。だから、あなたは默つてお客さまになつて居らつしやいよ。」
鵜崎は目を白黑させて懷中の三百圓をそつと握りながら俯向いてしまつた。
「着物着かへるから待つて頂戴。」小花は立上つて簞笥の抽斗を明け、「お作さアん。」とびつくりするやうな大き聲で女中の名を呼び「あたいの足袋がない事よウ――。」

## 二十一

正月は過ぎ二月の始めに新龜千代富士とやらいふ小花の家の姐さんは景氣よく噂の通り旦那の家へ乘込んだ。小花は其後の看板を借受け姉のお町が雲林堂と手の切れた後その日迄ぐづ〳〵と素人屋の二階にくすぶつてゐたのを說きつけて姉

妹二人で稼ぐ事にした。その資本といへば鵜崎の持餘した三百圓と雲林堂から姉が貰つた手切金二百圓とである。鵜崎はどう考へてもあの三百圓は持つてゐても心持がわるい處から日頃の吝嗇には似もやらず捨てた同然綺麗に小花にやつてしまつたので、其の後は新龜千代富士といふ藝者家の旦那も同樣毎日侯爵邸内の事務所と大須賀家へ通勤の歸りそつと人知れず立寄つて長火鉢の前で一杯やる身となつた。

四月の末いよ〳〵侯爵家の寶物賣立があつた。鵜崎は事務所からの慰勞金やら大須賀家からの心付やら。又幸水堂を始め其他の骨董商からの禮金に加へて殊に雲林堂からはその際鵜崎の口添へで大須賀家へ出入するやうになつた爲め十二分の御禮。それと共に藝者家の方は姉妹二人水入らずの稼ぎに鵜崎一人の身はどうやら懐手してゐても喰つて行けさうだといふ話。雲林堂はしうに淺草の方へ河





岸をかへ翰は勘當同樣亞米利加へ留學に追ひやられた後可哀さうなのは蝶子一人であつた。蝶子は翰の病毒を受けた爲め一時妊娠のやうに思はれたのは葡萄狀鬼胎とかいふ病症で其年盆時分手術の效もなく病院で死んだ。

「この小說は大正四五年頃の時代を寫したるものと御承知ありたし大正七年以後物價の騰貴人情の變化甚しければこゝに一言御斷り致す也」

おかめ笹 終

大正九年四月十七日印刷
大正九年四月二十日發行

定價金壹圓八拾錢

著作者　永井壯吉
發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彦
印刷者　東京市麻布區本村町十八番地　中野鎌太郎
印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

お笹かめ

著作權之章

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　電話本局五十一番　春陽堂　振替貯金一六一七番

# 荷風全集内容

## 第一卷


野心
地獄の花
夢の女
女優ナナ
〔梗概〕
洪水
エミル・ゾラと其の小說


## 第二卷


あめりか物語
船房夜話　牧場の道　岡の上　醉美人　長髮　春と秋　雪のやどり　林檎　惡友　舊寢覺　一月一日　あけがた　市俄古の一日　夏の海　夜半の酒場　おちば　夜の女　支那街の記　夜あるき　六月の夜の夢
ふらんす物語
船と車　私のちまた　ロオン河のほとり　蛇つかひ　晩餐　祭の夜がたり　霧の夜　おもかげ　再會　ひとり旅　橡の落葉　巴里のわかれ　黃昏の地中海　ボートセット　フォーストを聽く　記
西遊日誌鈔


## 第三卷


冷笑
歡樂
曇天
深川の唄
新歸朝者日記
監獄署の裏
父の恩
珊瑚集


## 第四卷


すみだ川
新橋夜話
掛取り、色男、風邪ごゝち、名花、松葉巴、五月闇、淺瀨、牡丹の容、畫すぎ、見果てぬ夢、祝盃
小品集
春のおとづれ、花より雨に、夏の町、狐、傳通院、下谷の家、日本の庭、樂器、
紅茶のあと



東京市日本橋通四丁目角
春陽堂
振替口座一六一五
電話本局七一一

391
87

終